

1 上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室

大 谷 晃 二

1 はじめに

平田市上石堂平古墳は、一辺8.8mの多角形墳である。その横穴式石室は、玄室長2.0m、幅1.1m、高さ1.3mと石室としては小型の部類に属す。本稿の課題は、この上石堂平古墳の築造時期がいつなのか、そして、その横穴式石室は出雲西部の石室の中でどのように位置付けることができるのかを探ることである。そこで、以下では、まず古墳時代終末期の出雲の須恵器編年を整理し、その上で上石堂平古墳の築造時期を明らかにしたい。そして、出雲西部の横穴式石室の編年を整理し、上石堂平古墳の位置付けと、島根半島西部の石室墳の動向について考えてみたい。

2 上石堂平古墳の築造時期～古墳時代終末期の須恵器編年～

(1) 上石堂平古墳の出土須恵器

上石堂平古墳の築造時期を示す資料は、墳丘盛土下の旧表土上から出土した須恵器蓋坏類である。その特徴をまとめると、

①蓋の口径（坏身の場合はセットとなる蓋の口径を受け部の付け根から判断した）は、12cm前後のもの、11cm前後のもの、10cm前後のものと大きく3種ある。

②坏蓋天井部もしくは坏身底部は、ヘラ切りの後、ナデ調整をする。また、ナデ調整の前に底部最外周のみに回転ヘラケズリを施すものも含む。

これらの口径と外形の特徴からは、筆者の須恵器分類（大谷1994）の蓋A 7型とA 8型となる。これらの型式では、ヘラケズリは省略されるのが一般的だが、上石堂平古墳資料には、この工程が一部残存したものも含んでいる。

(2) 出雲地方の7世紀の須恵器編年

筆者は出雲地方の須恵器編年と畿内との平行関係について1994年に試案を提示した。しかし、当時の問題意識が横穴式石室、横穴墓の受容時期の確認にあったため、7世紀代の編年については十分な検討を行なわなかった。この試案では、古墳時代通有の蓋坏で最も小型化した最新型式の蓋坏（蓋坏A 8型）を主として、小型でつまみとかえりをもつ蓋とこれに伴う坏（蓋坏C型）が出現する以前を6 A期として、さらに蓋坏C型と坏身に高台がつくB 1型が出現する時期を6 B期とした。1994年当時は、A 8型とC型のみで、B型を含まない良好な一括資料がなく、編年上はこの2時期にわけるにとどめたのである。

その後、横穴墓の展開と終末を検討するために、山陰横穴墓調査検討会の場において、7世紀の編年の細分と畿内との平行関係、実年代について、試案を提示した（大谷1997）。この細分案では、出雲6期をa～dの4小期に細分した。これはA 8型とC型、B 1型が、どのような順序で出現するかを想定できる可能性として細分したものであった。つまり、6 a期は蓋坏A 8型が単独で存在する時期、6 b期は蓋坏C 1型（つまみが乳頭状のもの）が出現する時期、6 c期は蓋坏C 2型（つまみが擬宝珠状のもの）が出現する時期、6 d期は蓋坏C型の法量が増し、蓋坏B 1型が出現

する時期としたのである。これらは、各小期の良好な一括資料があったわけではなく、想定しうる可能性として4段階を設定したのであった。

近年、6期の中での一括資料に近い資料が数例発見された。これを参考に、6期の細分を再検討し、上石堂平古墳資料の位置付けを考えてみたい。まず、参考となる出土資料として、以下のものがある（第1図8～47）。

①上塩治15支群10号横穴墓（鳥谷1997）では、玄室・前庭側壁の小横穴から蓋坏A7型とA8型の蓋5点、身8点、C1型蓋1点、低脚無蓋高坏A6型1点、平瓶C3型1点が一括出土している。

②上塩治16支群1号横穴墓（鳥谷1997）では、前庭部奥の壁際の黒褐色土層中から、寄せ集めた状態で一括完形品の形で出土した。蓋坏A7型の身が2点、蓋坏A8型の蓋2点、身2点、蓋坏C2型の蓋2点が出土している。

③高広II区S X01下層（足立・丹羽野1984）では、蓋坏A8型の蓋坏8組、蓋坏C型の身2点、低脚無蓋高坏A6型5点、低脚無蓋高坏A7型4点などが出土した。蓋坏のA8型が多くを占め、蓋坏A7型を含んでいない。

④高広II区S X01上層（足立・丹羽野1984）では、蓋坏A8型、C型、B型などが出土した。

こうした事例を見ると、口径が11～12cmの蓋坏A7型が、口径10cm前後のA8型や蓋坏C型と並存していることがわかる。そして、上塩治15支群10号横穴墓例→同16支群1号横穴墓例→高広II区S X01下層例の順で蓋坏A7型の個体数が減少し、蓋坏A8型の個体数が増加している。

このようにみると、上石堂平古墳の旧表土出土資料は、A7型5点とA8型3点が伴出しており、蓋坏C型を含まないことから、上塩治15支群10号横穴墓例に先行するものと判断することができる。また、上石堂平古墳例のように蓋坏A7型とA8型が供伴するのに対し、松江市北小原2号横穴墓例は、出土した須恵器がすべて蓋坏A7型であり、A8型を含んでいない（出雲5期の標式資料）。こうしたことから、北小原2号横穴墓例→上石堂平古墳例→上塩治15支群10号横穴墓例の順を考えることができる。

上記の検討から、以下のように編年の細分案を提示したい。

出雲5期 口径12cm前後の蓋坏A7型の時期。（松江市北小原2号横穴墓例）

出雲6a期 口径10cm前後の蓋坏A8型が出現。蓋坏A7型は残存する（平田市上石堂平古墳旧表土出土例）。

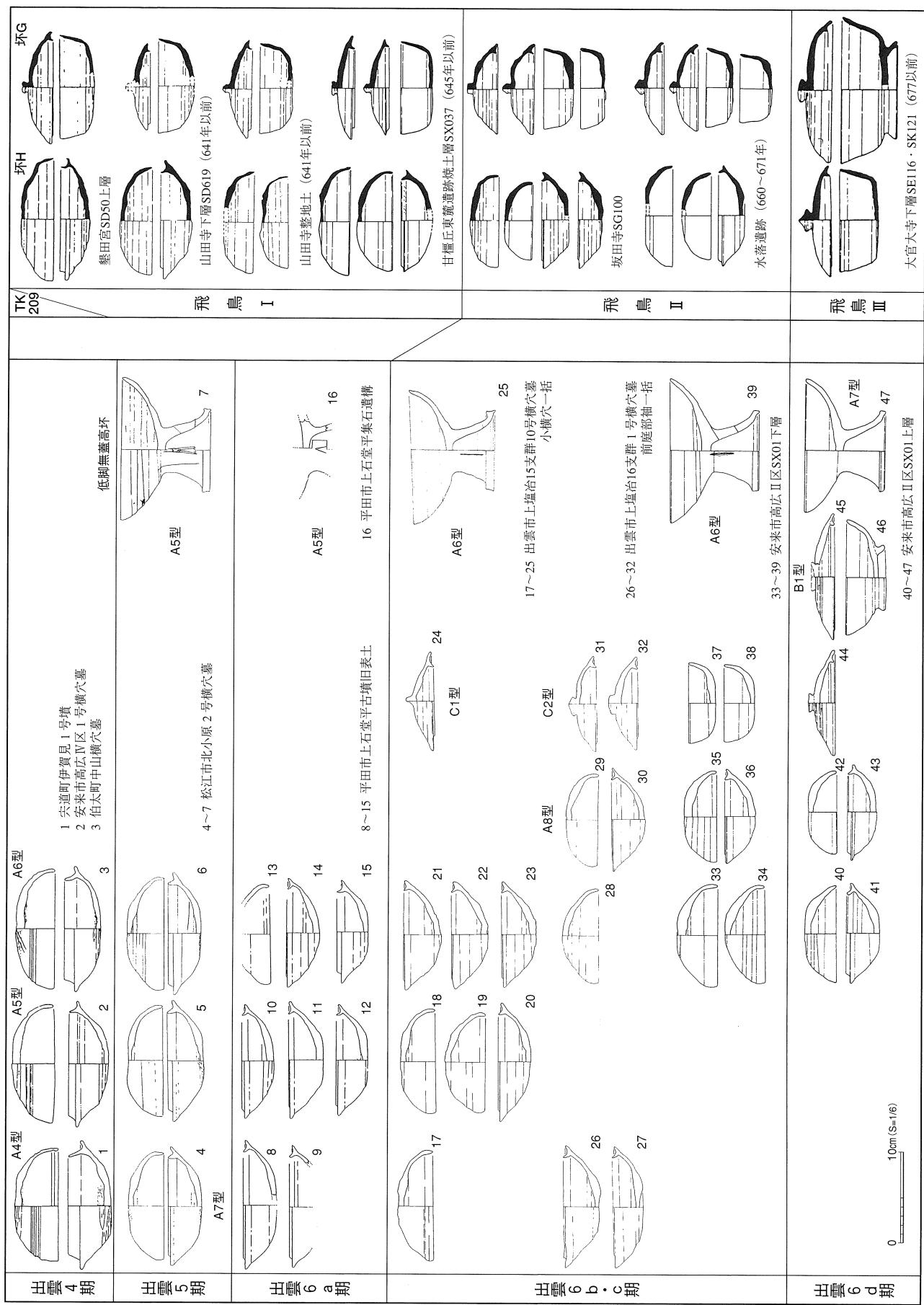
出雲6b・c期 蓋坏C型が出現。蓋坏A7型、A8型は残存し、A8型が主体をなす（上塩治15支群10号横穴墓、同16支群1号横穴墓、高広II区S X01下層例）。1997年でのbとcの区分は、ここでは保留して、一括しておきたい。

出雲6d期 蓋坏B型が出現。蓋坏A8型、C型は残存する。

以上より、上石堂平古墳の旧表土出土資料を出雲6a期として、蓋坏A8型が出現しながらも、蓋坏C型が出雲ではまだ登場しない時期と考えた。次に、これらの編年が畿内の編年にどのように平行するかを考えてみよう。

（3）飛鳥・藤原京城の須恵器編年との平行関係

飛鳥・藤原京城では、飛鳥I、II、III、IVの須恵器編年が示されてきたが、近年、各期の標式資料の間を埋める資料の発見が相次いできた。これらの資料は、川原寺下層S D02→山田寺下層S D



第1図 7世紀代の出雲の須恵器編年と飛鳥編年

619・山田寺整地土→甘檻丘東麓遺跡焼土層 S X 037→飛鳥池灰綠色粘砂層→坂田寺 S G 100（飛鳥Ⅱの標式資料）という順序が指摘されている（飛鳥・藤原1995）。

これらと出雲の須恵器編年との平行関係を確定することは、極めて困難であるが、ここでは、新器種である蓋坏C型（飛鳥坏G）の出現とその口径の特徴から検討してみたい。

まず、蓋坏B型（飛鳥坏B）出現以前の出雲6b・c期は、飛鳥Ⅰないし飛鳥Ⅱ期に平行すると思われる。坏Gの坏身の口径は、飛鳥ⅠからⅡへかけて縮小の度合を強めていき、飛鳥Ⅱの標識資料である坂田寺S G 100資料以後、口径が10cm以下のものが主流となり、9cmを切るものも増加する（西口1995）。出雲6b・c期の蓋坏C型の坏身口径も9cmを切るものであり、出雲での蓋坏C型は坂田寺S G 100以後の坏Gの影響で出現したと判断できる。従って、出雲6b・c期は飛鳥Ⅱ期に平行すると考えることができる。

さて、出雲4期は、伴出する金銅装大刀や馬具の傾向から、TK209型式を中心に平行することは明らかである（大谷1994）。従って、出雲5期と出雲6a期が飛鳥Ⅰ期に平行することとなる（筆者は、TK209型式の後半と飛鳥Ⅰの初頭は重複すると考えている）。

飛鳥編年の実年代については、以下のような指摘がある（西口1995、金子1995、白石2000）。

①山田寺の造営開始は『上宮聖德法王帝説裏書』によって舒明13年（641）と考え、山田寺の整地層とその下層のS D619出土資料の下限を641年と考える。

②甘檻丘東麓遺跡の焼土層を大化改新の際に焼亡した蘇我氏本宗家の邸宅に関連すると考え、同遺跡焼土層S X 037の下限を645年と考える。

③大化5年（649）～天智3年（664）の間に行なわれた冠位である「大化下」の木簡を出土した伝飛鳥板蓋宮跡下層遺構土坑S K 7501の出土土器が坂田寺S G 100の資料に近い。

④水落遺跡は、齊明6年（660）に造られ、遅くとも671年頃まで機能していた漏斗の遺跡と判断されることから、その出土土器の下限を670年頃と考える。

こうした見解から、飛鳥Ⅱは640年代～660年代と考えられ、このことから、出雲5期・6a期は7世紀前半に、出雲6b・c期は7世紀中葉から第3四半期の年代を与えることができる。従って、出雲6a期の上石堂平古墳は、7世紀前半でも第2四半期のものと考えることができる。

3 出雲西部の横穴式石室における上石堂平古墳の評価

（1）出雲西部の横穴式石室の変遷の再検討

出雲西部の横穴式石室の変遷と地域色を明らかにしたのは、角田徳幸・西尾克己、佐藤雄史らの研究であった（角田・西尾1989、佐藤1990）。

まず、出雲西部の大型石室墳の集中地帯である斐伊川・神戸川下流域（第4図）の状況を見ておきたい。角田・西尾は、この地域の石室を、割石・自然石を用いる1類、天井石をのぞき、各壁に切石と切組積みの技法を用いる2類、各壁を一枚石で構成する3類に大別した（分類の詳細は第1表を参照）。

そして、各類型を時期差ととらえ、それぞれ1期～3期として編年した。この編年の大枠については、筆者も賛成であるが、近年の出雲市塩冶地域での三田谷3号墳の発掘調査によって、3類石室に後出する石室の存在が明らかとなり、類型分けの一部を見なおす必要が生じた。

出雲市三田谷3号墳（高橋・片倉2000）は、外護列石をめぐらす5.5m×6.0mの方墳である。横

穴式石室は、残存全長約4mを測り、玄室長さ約185cm、幅約125cmと狭長なもので、正方形に近くなる3類石室と大きく異なる。残存する奥壁は1枚であるが、その上にさらに積んでいた可能性もあり、側壁は切石を2段程度積むものと思われる。特徴的なのは玄門であり、玄室側壁と羨道側壁を一連に作り、玄門立柱石の部分のみ、側壁を割り込んでいる。従って、側壁の内側に玄門立柱石が位置するのである。玄室内には3類石室と同様に板石を敷き詰める。この古墳の時期は、墳丘から出土した蓋環C1型の蓋1点によって、出雲6b・c期であると判断され、3類石室の代表例である出雲市小坂古墳（出雲4期の須恵器を出土）に後出するものである。

さて、三田谷3号墳の石室と同じ型式のものが、斐川町高野2号墳に見られる。従来、高野2号墳は、角田・西尾によって2c類に分類され、2期後半に位置付けられていた。三田谷3号墳と高野2号墳の石室の特徴は、玄室プランが狭長であり、玄室側壁の一辺を複数の石材を並べて構築すること、さらに最大の特徴は、側壁の内側に玄門立柱石を立てることである。これに先行する3類石室の多くが、玄門立柱石を玄室と羨道の側壁の間に組み込んでいることと比べると、石室構築の工程上大きな違いである。

これらの石室は、3類石室で見られる各壁の一枚石志向に逆行する側壁の構成や、玄門の構築手法などから、3類石室とは異なる系譜の石室の可能性も考えられる。一方で、同様に側壁の内側に玄門立柱石を立てながらも、玄室各壁に強い一枚石志向が認められる出雲市光明寺2号墳なども、小坂古墳と同じ3期ながら、後出する可能性も考えられる。こうした三田谷3号墳や高野2号墳の石室を3類とは区分して、その時期を4期として設定したい。

一方、上石堂平古墳の位置する島根半島西部の横穴式石室（第3図の範囲）を集成・分類した佐藤雄史は、この地域の石室を1～6類に分類し、このうち、1類（小谷下古墳）、3a類（山根垣古墳）、3b類（佐皿谷奥古墳）、4b類（美談神社2号墳）をそれぞれ角田・西尾の分類の1類、2a類、2b類、3a類に対応するものとした（第1表）。そして、島根半島西部では、斐伊川・神戸川下流域と同様の石室変遷が展開しており、かの地域からの強い影響下にあることを明らかにした。

佐藤は、出雲市大寺2号墳を一枚石を志向する石室として4a類として分類し、高野1号墳（角田・西尾分類の3c類）に対応させている。しかし、大寺2号墳の石室は先の三田谷3号墳、高野2号墳と同様に、玄門立柱石が側壁の内側に立てられており、高野1号墳とは別型式とみなすべきであろう。

また、2類石室は、奥壁は一枚石かその上に1段石を補い、側壁は基部より割石を数段積むもので、割石を数段に積み両袖式のもの（2a類）とブロック状の石材を2～4段積みにし、片袖式のもの（2b類）に細分している。佐藤は、これらの系譜は不明だが、先の1類、3a類、3b類、4b類と混在して広く分布し、主に群を形成する小規模な石室墳に採用され、島根半島西部の地域色を形成する石室であるとする。

この2類のうち、2b類石室（第2図下）は、割石積みではありながらも、その石材はブロック状に割り出されたり、また部分的にこれを削り、切石加工を施す状況がうかがわれる（平田市伊儀下古墳）。石材の加工の程度と玄門立柱石が片方にしかないということを除けば、基本的な石室構築技法は、佐藤3a・b類石室を踏襲したものであると言うことができる。石材が、通常の自然石ではなく、ブロック状に割っていることなどは、3a・b類石室の影響を考えなくては理解できな

第1表 出雲西部の横穴式石室分類の対照表

斐伊川・神戸川下流域 (角田・西尾1989)		島根半島西部 (佐藤1990)		本稿 の 分類	型式の特徴	
1	大念寺 妙蓮寺山	1	小谷下 口宇賀	A型	割石・自然石を用い、奥壁はほぼ一枚で不足部分を1~2段の石材で補う。	
2 a	上塩治築山 放れ山 塚山 刈山4号	3 a	山根垣	B1 型	天井石をのぞき、奥壁、側壁に切石を用い、奥壁は一枚、側壁には切り組み積みの手法を用いる。	玄室側壁を4~5段積みにし、羨道を切石で構成する。
2 b	宝塚 出西小丸	3 b	佐皿谷奥 石臼	B2 型		大型の切石で切り組み積みにして2~4段に積み上げる。
3 a	地蔵山	4 b	美談神社2号	C型	各壁・天井を切石の一枚石で構成するもの。玄室平面形は幅広の正方形に近いものとなる。	玄門は、一枚石による剖抜玄門。
3 b	小坂古墳 大梶 光明寺2号				玄室床面には板石(切石)を敷く。	切石の袖石とまぐさ石による組み合せ玄門がある。
3 c	高野1号 高野3号					両側壁の内側に割りこみを設けて袖を立てる。
2 c	布子谷 部西・結城				側壁は一枚石もしくは、これを強く志向する。両側壁の内側に割りこみを設けて袖を立てる。	
三田谷3号 高野2号※		4 a	大寺2号墳※	D型	側壁は、1段ないし2段積み。 両側壁の内側に割りこみを設けて袖を立てる。	
		2 a	大前山	A型	奥壁は、一枚石かその上に1段石を補い、側壁は基部より割石を数段積む。	割石を数段積みにする。
		2 b	伊儀下 矢尻ヶ原 定岡谷5・ 10・11号	b型		ブロック状の石材を2~4段積みにする。
		4 c	山崎 奥屋敷	出雲型石棺式石室		

※は大谷が分類の位置付けを改変したもの。

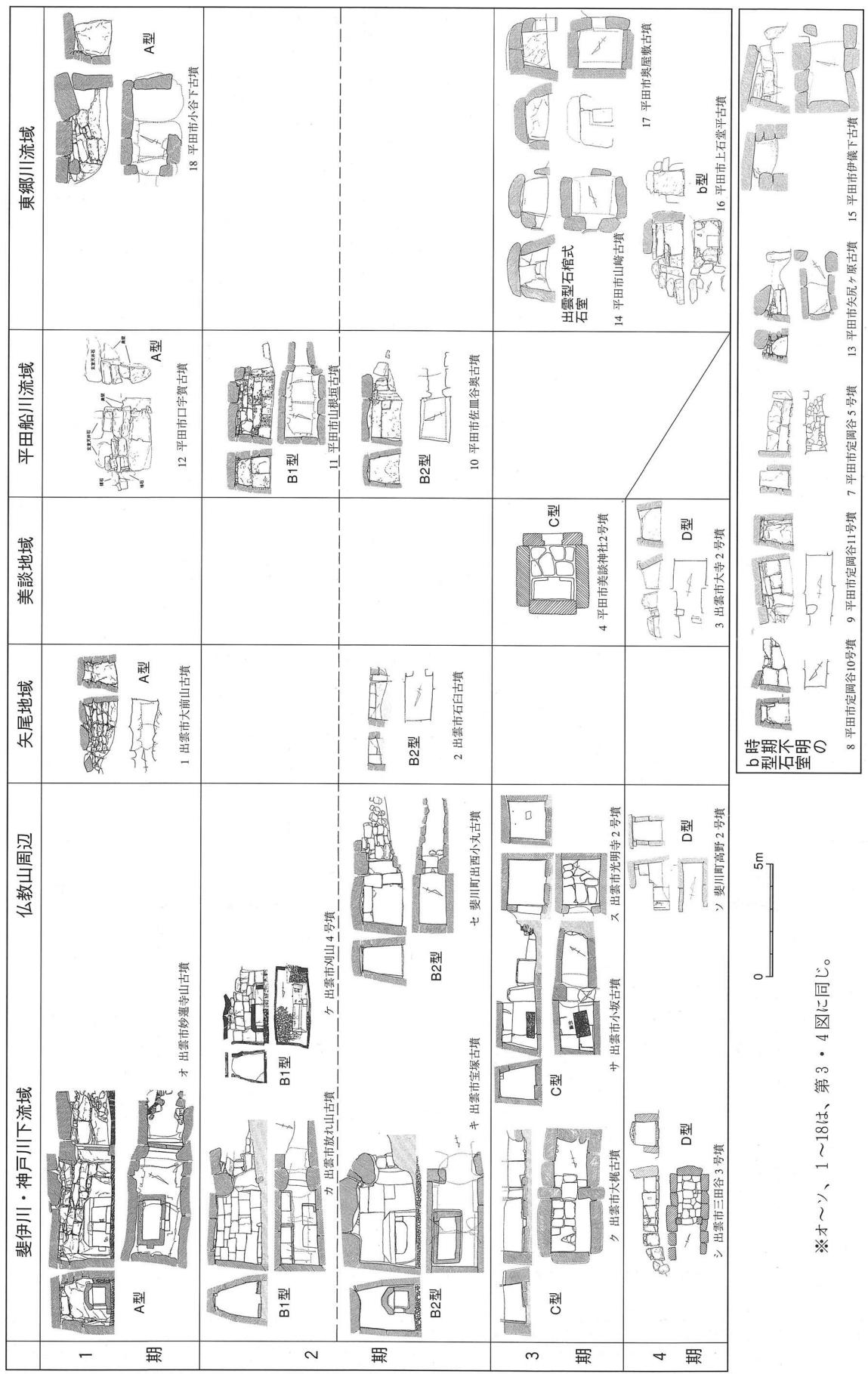
第2表 出雲西部の横穴式石室編年表

須恵器		西部 石室	斐伊川・神戸川下流域		島根半島西部		東部 石室	出雲東部	
畿内	出雲		今市・塩治	古志	馬木	出西			
T K 4 3	3 期	1 期	大念寺A 妙蓮寺A		大前山A 口宇賀A 小谷下A		御崎山	古天神	
T K 2 0 9			上塩治築山B1		山根垣B1				
T K 2 0 9		4 期	塚山B1 放れ山B1 刈山4号B1		山根垣B1		岩屋後	向山1号	
			宝塚B2 刈山5号B2 出西子丸B2		石臼B2 佐皿谷奥B2				
飛 鳥 I		5期	地蔵山C 大梶C 小坂C		寺山1号 山崎 奥屋敷		山代方墳 永久宅後	廻原1号 若塚	
			美談神社2号C 上石堂平b						
飛 鳥 II	6b・ c期	4 期	三田谷3号D 高野2号D		大寺2号D				

凡例 ※ゴチック体は、遺物から時期の判断が可能なものの。※は、出雲型石棺式石室。

※出雲の須恵器編年は大谷1997を本稿で修正したものである。※東部の石室は、出考研1987による。

※古墳名横のアルファベットは、第1表の石室分類。



第2図 島根半島西部と斐伊川・神戸川下流域の石室変遷図

い。これらの石材加工が3a・b類に比べて粗雑なのは、2b類石室の多くが小規模な石室墳であることから、被葬者の階層が低く、加工を簡略化したことによると判断される。従って、切石を丁寧に施した3a・b類石室に対して、2b類石室はこれを模倣しながらも、その加工を簡略化し、その規模を小型化したものと考えることができる。

このように考えると、2a類石室の大前山古墳は、佐藤分類の1類石室の小型化したものであり、石材加工の点では、1類石室と同じものと見ることができる

(2) 石室の分類と編年

以上見てきた角田・西尾、佐藤らによる出雲西部の横穴式石室の分類を対照・整理したものが第1表である。以下では、出雲西部全体の概況を考えるために、各氏の分類をA型～D型として整理した（第1表）。

- A型 割石・自然石を用い、大念寺古墳以外は、大型の腰石を用いる。
- B型 天井石を除き切石を用い、切組積み手法を用いて壁を構築する。側壁を4～5段積みにするB1型と、2～4段積みのB2型がある。
- b型 石材の積み方、形態はB型と同じだが、切石加工が粗雑なもの。
B型の模倣・簡略化させたもの。
- C型 天井・各壁を切石の一枚石で構成する。玄室平面形は、正方形に近いものとなる。玄門は割り抜き玄門と、立柱石とまぐさ石を組み合わせるものがある。立柱石の位置には、玄室と羨道の側壁の間にはさみ込まれるものと、側壁の内側に立つものとがある。玄室床面には、板石・切石を敷くものが多い。
- D型 狹長な玄室平面形で、玄室側壁を複数の石材を並べて構築し、玄門立柱石を側壁の内側に造るもの。

これらのA型～D型を1期～4期として編年する（石室の実測図は第2図を参照。石室の詳細な平行関係、須恵器編年との対応は、第2表を参照願いたい）。

(3) 上石堂平古墳の石室の位置付け

上石堂平古墳の横穴式石室の特徴をまとめると、以下のようになる。

- ①玄室は、長さ2.0m、幅1.1mで長幅比（長さ/幅）は1.8となり、長方形の玄室平面形をとる。
- ②玄門には立柱石を2本立てる両袖式の石室である。
- ③玄室の壁面構成は、奥壁は一枚石を立て、東側壁は長方形のブロック状の石材を2段に積んで構成し、西壁も同様な石を1段置き、その上を細長いブロック状の石材で充填する。
- ④壁面の石材は、ブロック状に割り出した石材を部分的に削り整えた一種の切石である。また西側壁には切組み積み状に石を割り整えている部分も見られる。
- ⑤玄室床面は、板石を敷き詰めている。

石室の基本的な構造は、B2型石室に類似するが、その石材はブロック状に割り出した石材に切石風の削り加工を粗く施すものであり、B型石室との精粗の差は歴然としている。従って、上石堂平古墳の石室は、b型石室に位置付けることができる。他のb型石室は片袖式であり、上石堂平古墳が現在唯一の両袖式のb型石室となる。

上石堂平古墳は、b型石室では唯一出土遺物によって時期を判断することができ、その築造時期が⁶出雲6a期であることから、b型石室の造営時期の一端を知ることができる。では、すべてのb

型石室が出雲 6 a 期の所産なのであろうか。

先に見たように、b 型石室は B 型石室の石室プランや壁面構築などを踏襲するものであり、B 型石室を模倣・簡略化したものである。従って、b 型石室の出現時期は、B 型石室の出現以降となる。しかし、その後、斐伊川・神戸川下流域では、B 型石室から C 型石室へと一枚石を強め、玄室平面形も正方形に近いものへと変化し、さらに出雲 6 期には D 型石室の出現を見る。こうした状況は、島根半島西部でも見られ、平田市美談神社 2 号墳は、地蔵山古墳と同じ割り抜き玄門をもつ C 型石室であるし、隣接する出雲市大寺 2 号墳は D 型石室である。島根半島西部では、出雲市石臼古墳、平田市佐皿谷奥古墳などの B 2 型石室以降、B 型石室は見られない。

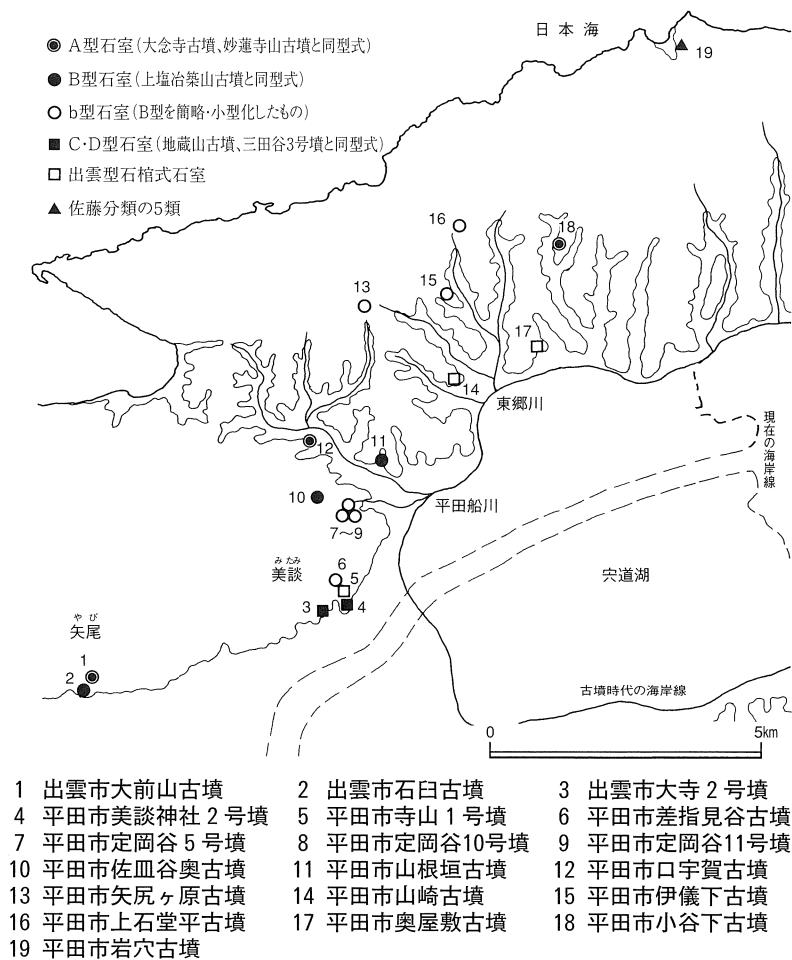
従って、出雲 6 a 期になって、B 型石室を模倣して上石堂平古墳を造営することは不可能なのであって、B 型石室と同時に存在した b 型石室が、その後も継続的に作られ、この上石堂平古墳にまで引き継がれていたと理解しなければならない。

さて、筆者は、斐伊川・神戸川下流域の大首長墳の石室である B 型石室を模倣した b 型石室が群集墳に採用されている状況を、群集墳被葬者に隸属する人々が、大首長墳（上塩治築山古墳など）や在地首長墳（山根垣古墳など）の造営に動員された結果、そこで習得した技術と知識をもって、直接的な支配者である有力農民の群集墳を築いたことによって生じた現象であると考えた（大谷 1999・2000）。

こうした理解に立って、上石堂平古墳の状況を説明するなら、それは上石堂平古墳の地域の人々が C 型石室の造墓に動員される前に、斐伊川・神戸川下流域の首長墳造営への労働力の動員から解放されたことを意味している。つまり、彼らは C 型石室を知らないために、その後も b 型石室の造墓を継続したと解釈するわけである。

(4) 島根半島西部の横穴式石室墳の動向

第 3 図は、島根半島西部の横穴式石室の型式が判断できるものの分布を示したものである。これを見ると、美談地域では美談神社 2 号墳、大寺 2 号墳のように C・D 型石室が継続して造営されているものの、東郷川流域にはこうした新しい石室が見られない。そのかわりに、山崎古墳、奥屋敷古墳などの出雲型石棺式



第 3 図 島根半島西部の横穴式石室の型式別分布図

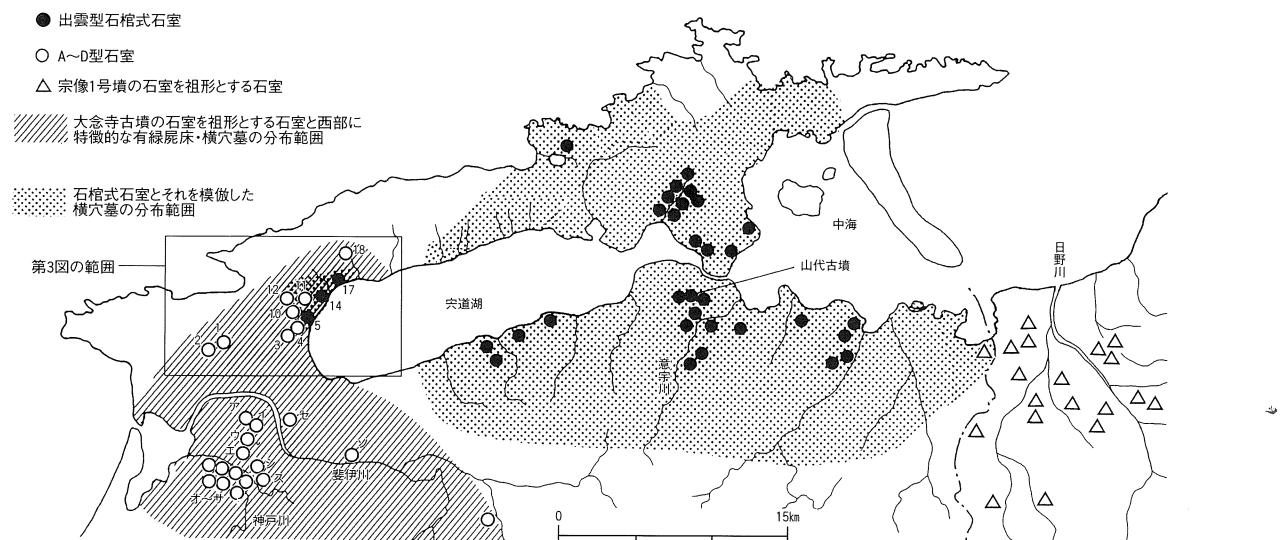
石室が分布しているのである（出考研1987）。石棺式石室は、出雲東部の首長の墓室として採用されたものであり、その特異な形態と構造は、独特の葬送儀礼に基づくものである（大谷2000）。東郷川流域の首長が石棺式石室を採用しているということは、その葬送儀礼において、出雲東部の諸首長、特に山代方墳などの意宇の大首長と共に葬送儀礼をするなどの親縁性をもった人物が存在したことを意味している。

この山崎古墳や奥屋敷古墳の石室は、石棺式石室編年の3期のものであり、その時期は松江市西宗寺古墳出土遺物から出雲5期ないし出雲6a期と見られる。このようにみると、出雲5期ころに、東郷川の流域には、出雲東部との親縁な関係を結ぶ首長が登場し、以後、斐伊川・神門川下流域とは、配下の民衆を造墓労働力として供給する関係を絶ったと推測できる。この時期には、斐伊川・神戸川下流域では、地蔵山古墳（出雲4期頃と推定される）以後、首長墳の墳丘規模・石室規模が急速に小型化しており、斐伊川・神戸川下流域の首長権力が及ぶ地域が縮小したことをうかがわせる。

一方、美談地域では、山崎古墳などと同じ型式の石棺式石室の寺山1号墳が築かれるが、隣接して地蔵山古墳類似のC型石室の美談神社2号墳、これに後続するD型石室の大寺2号墳が継続して築造されており、この地の首長が斐伊川・神戸川下流域と密接な関係を維持していたことを示している。

4 おわりに～上石堂平古墳の被葬者像～

島根半島西部の古墳時代後期の動向を概観すると、上塩冶築山古墳などのB型石室が築かれた出雲3期・4期の頃には、島根半島西部全域にB型石室やそれを模倣したb型石室が構築され、斐伊川・神門川下流域の大首長の勢力下にあったと推測される。しかし、地蔵川古墳が造営された後の



ア塚山古墳 イ大念寺古墳 ウ上塙冶築山古墳 エ地蔵山古墳 オ出雲市妙蓮寺山古墳 カ出雲市放れ山古墳 キ出雲市宝塚古墳 ク出雲市大梶古墳 ケ出雲市刈山4号墳 コ出雲市刈山5号墳 サ出雲市小坂古墳 シ出雲市三田谷3号墳 ス出雲市光明寺2号墳 セ斐川町出西小丸古墳 ソ斐川町高野2号墳 1出雲市大前山古墳 2出雲市石臼古墳 3出雲市大寺2号墳 4平田市美談神社2号墳 5平田市寺山1号墳 10平田市佐皿谷奥古墳 11平田市山根垣古墳 12平田市口宇賀古墳 14平田市山崎古墳 17平田市奥屋敷古墳 18平田市小谷下古墳

第4図 出雲・西伯耆の横穴式石室の地域色
(大谷1999・2000を一部訂正) (番号・記号は第2・3図に同じ) (地形・水系は古墳時代の推定)

出雲 5 期になると石棺式石室を構築するなど、出雲東部の大首長との関係を深めた首長が美談、東郷川流域に出現する。そして、美談地域は、出雲 6 a 期に斐伊川・神戸川下流域の首長との関係を継続させるが、東郷川流域では、もはや斐伊川・神戸川下流域の首長との関係をうかがうことはできず、在地に伝承されたかつての b 型石室を作り続けた。それが、上石堂平古墳なのである。

上石堂平古墳は、一辺8.8mの多角形墳であり、その墳丘規模は、ほぼ同時期の単独墳である出雲市三田谷 3 号墳 (5.5m × 6.0m の方墳)、出雲市大寺 2 号墳 (一辺約10m の方墳) と比べても遜色はない。また、横穴式石室は、玄室長2.0m、幅1.1m、高さ1.3m と小型の部類であるが、同時期の石室墳ではやはり一般的な規模である (第 2 図)。こうした小型の墳丘・石室の状況は、終末期古墳の一般的な傾向でもあり、さらに深い谷の奥に単独で立地するなども終末期古墳の特徴を示している。こうした状況から、その被葬者の階層的な地位は、少なくともこの谷平野に基盤を置いた小首長であったと判断される。

本稿の主旨は、西尾克己、原俊二、曾田辰雄、大谷晃二の討議によるものである。

文 献

- 足立克己・丹羽野裕 1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
- 出雲考古学研究会 1987『古代の出雲を考える 6 石棺式石室の研究』
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
- 大谷晃二 1997「出雲地方の須恵器編年表」『第 7 回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓』
山陰横穴墓研究会
- 大谷晃二 1999「上塩治築山古墳をめぐる諸問題」『上塩治築山古墳の研究』 島根県古代文化センター
- 大谷晃二 2000「地域報告 出雲 出雲東部の大首長の性格と権力」『第 8 回東海考古学フォーラム 三河大会 東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会
- 岡崎雄二郎 1974「松江・北小原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第 V 集 島根県教育委員会
- 角田徳幸・西尾克己 1989「出雲西部における後期古墳文化の検討」『松江考古』第 7 号 松江考古学談話会
- 金子裕之 1995「甘檜丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25』奈良国立文化財研究所
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器 1 都城の土器集成』古代の土器研究会編
- 古代の土器研究会編 1993『古代の土器 2 都城の土器集成 II』古代の土器研究会編
- 古代の土器研究会編 1994『古代の土器 3 都城の土器集成 III』古代の土器研究会編
- 佐藤雄史 1990「島根半島西部における横穴式石室の様相」『島根考古学会』第7集 島根考古学会
- 山陰考古学研究集会 1996『第24回山陰考古学研究集会 山陰の横穴式石室』
- 白石太一郎 2000「畿内における古墳の終末」(補註 3)『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 高橋智也・片倉愛美 2000「X I .三田谷 3 号墳」『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書 I — 上塩治横穴墓群第17・18・19・38支群、大井谷Ⅲ遺跡、石切場跡1・2、

三田谷3号墳』出雲市教育委員会

鳥谷芳雄 1997『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大井谷石切場跡・上塩
治横穴墓群 第14支群・第15支群・第16支群』 島根県教育委員会

西口壽生1995「第V章 遺物 1 土器5 小結」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ—飛鳥水落遺跡の
調査—』奈良国立文化財研究所

菱田哲郎1997「近畿地方西部・山陰・山陽」『古代の土器研究会 第5回シンポジウム 古代の土
器研究—律令の土器様式の東・西5 7世紀の土器—』古代の土器研究会

(島根県立松江北高等学校)